

東京演劇集団風

〈俳優・スタッフ〉募集要項

東京演劇集団風〈俳優・スタッフ〉募集要項

目次

劇団概要

- 名称
- 劇団員構成
- 劇団付帯施設
- 募集要項

実習生について

- 応募資格
- 実習期間
- 実習および指導方法
- 主な実習課程

研究生について

- 応募資格
- 活動内容と基本方針

試験内容

- 1次募集
- 2次募集
- 応募方法
- 試験内容
- 受験料
- 合格発表
- 場所

劇団員について

東京演劇集団風の主なレパートリー作品

受賞歴

- 先輩たちからのメッセージ

東京演劇集団風〈俳優・スタッフ〉募集要項

劇団概要

〈今、なぜ演劇なのか、この時代、この社会において演劇の為すべきことは何であるか〉という問いとともに、1987年、東京演劇集団風を創立。

劇団の主な活動として〈レパートリーシステムによる劇場での上演〉〈海外交流〉〈バリアフリー演劇〉〈青少年を対象とした全国巡演活動〉を行っています。

1999年、東京・東中野に拠点劇場〈レパートリーシアター KAZE〉を建設。理念・形にとらわれることなく、自由な精神を持って、「舞台と客席」の相互の交感のなかで演劇の本質を発見し、質の高い実践を目的とした〈レパートリーシステム〉を取る劇場として、本格的な活動を開始しました。

同時に群馬県みなかみ町に、専属の俳優・スタッフのワークショップの場、またレパートリー作品のストックヤードも兼ねた“月夜野アトリエ演劇工房”—— 思考し、実践を重ね、演劇の根幹と向き合う場——を併設。

レパートリーシアター KAZE は、劇団専属劇場の特色を活かし、20世紀を代表する亡命作家ベルトルト・ブレヒトや現代作家マテイ・ヴィスニユック(ルーマニア出身・パリ在住)の作品などの新作・レパートリー作品を柱に上演活動を展開しています。

2003年、《ビエンナーレ KAZE 国際演劇祭》を開催。ヨーロッパをはじめとする多国間による演劇人との交流、共同制作は今なお続き、現代演劇の可能性を追求しています。その協働から生まれた作品は、青少年を対象とした全国巡演活動での鑑賞へとつながっています。

2019年、〈バリアフリー演劇〉の上演活動を開始。これまでの演劇の舞台を、目が見えない人たちや耳の聞こえない人たちとも一緒に同じ空間を共有できるように——バリアフリーという課題を舞台の構成上の付属的要素としてではなく、演劇形式そのものの本質として——舞台づくりを試みています。

レパートリーシステムによって観客とともに創り上げた作品や、海外の演劇人との共同制作によって生まれた作品・バリアフリー作品が、全国巡回公演や、海外で上演され、またレパートリーシアター KAZE で上演される——この循環のなかで、私たちの演劇的試みを深化させるとともに、観客に対して自在に、そして舞台に対して意欲的に、創造活動を展開していきたいと考え、2019年現在、年間約250回の上演を行っています。

東京演劇集団風が思考し、実践を重ねる演劇。それは“新しい演劇の実践”ではなく、社会とその社会を構築する人々、つまり“現代と演劇の新たな実践のための演劇”の探求です。

■ 名称

株式会社 東京演劇集団風

■ 劇団員構成

代表 柳瀬太一 芸術監督 浅野佳成 ほか30名（俳優24名 スタッフ6名）

■ 劇団付帯施設

専属の拠点劇場〈レパトリーシアター KAZE〉 東京・東中野
月夜野アトリエ演劇工房 群馬県みなかみ町・月夜野

■ 所在地

〒164-0003 東京都中野区東中野1-2-4

TEL.03-3363-3261 FAX.03-3363-3265

E-mail:info@kaze-net.org

URL://www.kaze-net.org



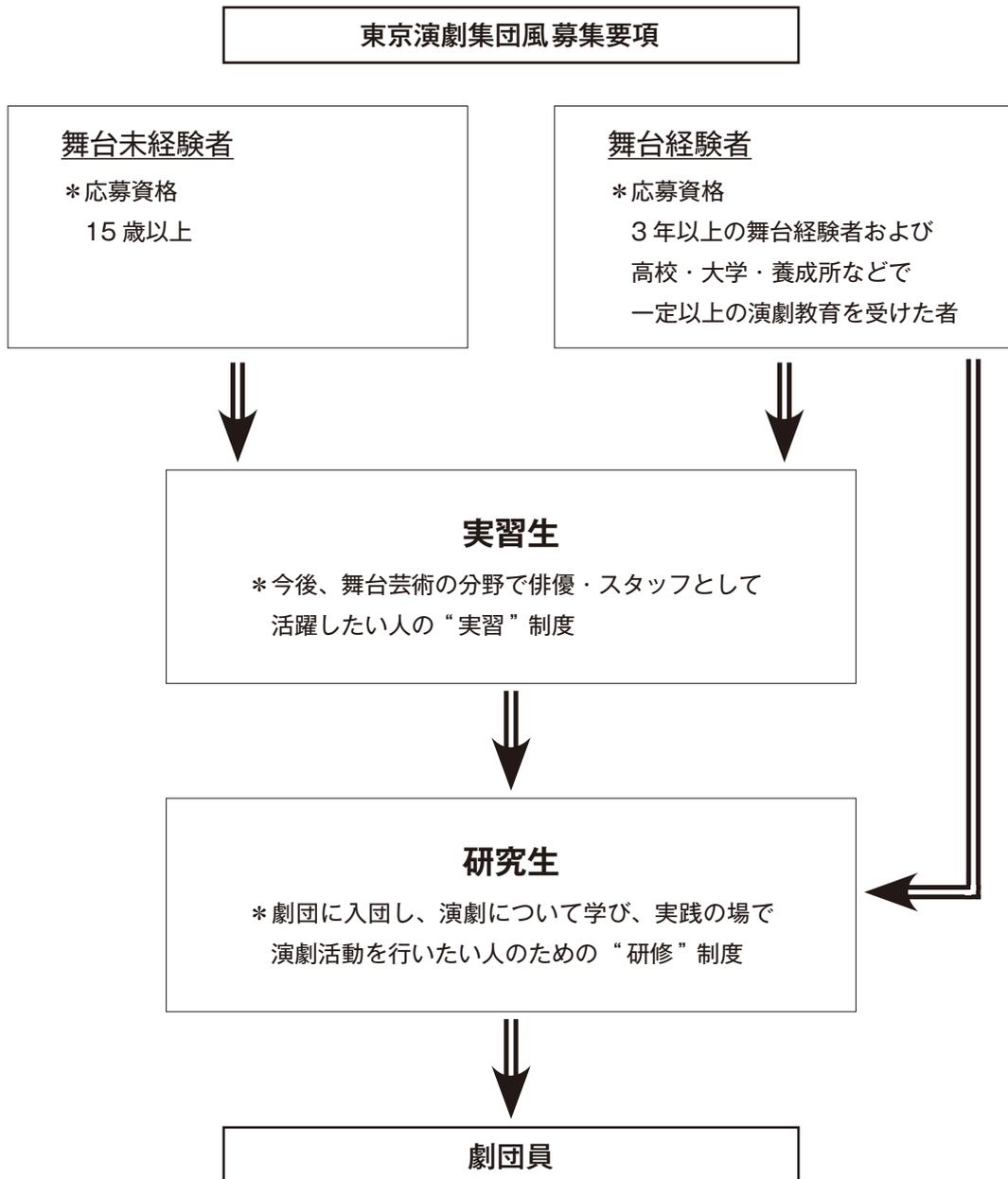
専属の拠点劇場〈レパトリーシアター KAZE〉 東京・東中野

月夜野アトリエ演劇工房 群馬県みなかみ町・月夜野



■ 募集要項

劇団は演劇を学び、将来、舞台芸術に携わりたい人、または入団を希望する人を対象に下記の要項にて実習生・研究生の募集を行います。



実習生について

舞台経験の有無は問いません。将来、俳優およびスタッフとして舞台芸術に携わりたい人のための養成・育成のための“実習”です。1年の実習期間を経て、その実績が認められた人は、希望により研究生となります。



2012年度 実習生卒業公演
マテイ・ヴィスニツェク作／浅野佳成 演出
『戦場のような女 あるいはボスニア紛争の戦場のような女の性について』
倉八ほなみ (2017年入団)／高階ひかり (2015年入団)



ウィリアム・シェイクスピア作／ペトル・ヴトカレウ+浅野佳成 演出
『ハムレット— to be or not to be』
佐野準 (2006年入団)

■ 応募資格

東京演劇集団 風の芝居をみていること。15歳以上。

■ 実習期間

1年間

■ 実習および指導方法

劇団の創造活動に参加し、実践を通して『演劇』を学んでいく—というのが基本的な方針です。

また俳優志望の人には、劇団の演出家・俳優がその指導にあたります。

■ 主な実習課程

- *リーディング
- *実習発表
- *〈動き〉と〈身体〉のためのワークショップ等(発声・演技のための表現の指導もこのワークショップで行います)
- *全国巡演活動の参加(ギャランティは保障されます)

※ 実習生・研究生ともに月謝・実習費などは無料ですが、プロの舞台に立たせるための活動内容です。

〈演劇に携わる〉というはっきりとした意志を持ってきてください。

※ 実習生・研究生ともに原則としてアルバイトは禁じられます。

※ なお、劇団の実習生・研究生は舞台俳優・舞台スタッフ育成のためのものです。マスコミ・声優等、いわゆるタレント志望の方を対象とした募集は行っておりません。

研究生について

舞台実績・経験がある人で、入団を希望する人を対象に募集を行います(俳優およびスタッフ)。演劇について学び、実践の場で演劇活動(俳優・スタッフ)を行うための“研修”制度です。

〈3カ月の研修期間〉と最長3年間の研究生としての劇団活動の期間を経て、その実績が認められた人は、劇団員として入団が認められます。

また3年間の期間を経ず早期入団を希望する場合は、年度末の面談・劇団総会での承認を経て入団が可能です。

■ 応募資格

風の芝居をみていること。18歳以上。3年以上の舞台経験がある者、または高校の演劇科および専門学校、俳優養成所、大学の演劇科で一定の演劇教育を修了した者、およびそれに同等する教育課程を有した者(高校演劇部経験者も指導者の推薦状があれば受験可能です)。

■ 活動内容と基本方針

〈研究生〉の劇団における活動は、劇団員とほぼ同じ活動です。

- ◎リーディングや〈動き〉と〈身体〉をテーマとしたワークショップおよび上演現場での研修を3カ月間行い、その後、劇団の創作活動、上演活動に参加します。
- ◎また劇団の演出家・俳優による研究生のためのリーディング発表や作品の上演など、演技や舞台制作のための指導を行うと同時に、劇団の上演活動の実践とゼミナールなどを通して「演劇と社会」「演劇の本質」など、「今、人々にとって演劇とは何か——」を学び実践していくというのが基本的な方針です。
- ◎3カ月間の〈研修期間〉を修了した研究生には、研究費として月額8万円が支給されます。また全国巡演活動参加時のギャランティは保障されます。
- ◎〈研究生〉は劇団活動に参画し、俳優・スタッフ(演出も含む)として、東京演劇集団風の演劇活動に携わりたい人の育成を目的としたものです。

※ 実習生・研究生ともに月謝・実習費などは無料ですが、プロの舞台に立たせるための活動内容です。

〈演劇に携わる〉というはっきりとした意志を持ってきてください。

※ 実習生・研究生ともに原則としてアルバイトは禁じられます。

※ なお、劇団の実習生・研究生は舞台俳優・舞台スタッフ育成のためのものです。マスコミ・声優等、いわゆるタレント志望の方を対象とした募集は行っておりません。



マテイ・ヴィスニョック作／浅野佳成演出
『ジャンヌ・ダルク—ジャンヌと炎』
白根有子(1999年入団)／栗山友彦(1998年入団)

試験内容 実習生・研究生ともに

■ 1次募集

毎年度8月

■ 2次募集

毎年度2月

— 詳細は劇団までお問い合わせください

■ 応募方法

劇団ホームページから”応募用紙”をダウンロードしてください

用紙に記入のうえ顔写真を添えて、作文「私と演劇」(400字3枚以上)と一緒に劇団に提出してください(郵送可)

■ 試験内容

面接

* スタッフ希望の方は、自身の作品か実績となる資料を持参してください

■ 受験料

なし

■ 合格発表

後日、郵送にてお知らせします

合格時、入所金などはありません

■ 場所

東京演劇集団風〈レパトリーシアター KAZE〉で行います

劇団員について

劇団員は芸術監督と専属契約を結び、年間8～10作品、250ステージ程の公演(レパートリーシアターKAZE、全国巡回公演等)及びそれに関わる活動に出演、参加します。

年間の活動に対して、所定のギャランティが支払われます。



ライル・ケスラー作／浅野佳成 上演台本・演出『Touch ～孤独から愛へ』
全国巡回公演の舞台

サン＝テグジュペリ作／浅野佳成 演出『星の王子さま』文化庁「文化芸術による子供の育成事業—巡回公演事業—」の舞台



東京演劇集団風の主なレパートリー作品

ベルトルト・ブレヒト作

肝っ玉おっ母とその子供たち — あとから生まれてくる人たちに

三文オペラ

マハゴニー市の興亡

乞食 あるいは 死んだ犬

第三帝国の恐怖と悲惨

セチュアンの善人

コーカサスの白墨の輪

マテイ・ヴィスニユック作

ジャンヌ・ダルク — ジャンヌと炎

フランクフルトに恋人がいるサクソ奏者が語るパンダの物語

戦場のような女 — あるいはボスニア紛争の戦場のような女の性について

ニーナ あるいは剥製のかもめの脆さについて

なぜ へカベ

母が口にした「進歩」その言葉はひどく嘘っぽく響いていた

記憶の通り路 — 孤独に苛まれている老婦人には気をつけて

アントン・パープロヴィチ・チェーホフ作

かもめ

三人姉妹

桜の園

サン＝テグジュペリ作

星の王子さま

ライル・ケスラー作

Touch ~孤独から愛へ

松兼功 作

ヘレン・ケラー ~ひびき合うものたち

ウィリアム・シェイクスピア作

ハムレット — to be or not to be

ブライアン・マキャベラ作

ピカソの女たち~オルガ

アルペール・カミュ作

異邦人

サミュエル・ベケット作

ゴドーを待ちながら



ベルトルト・ブレヒト作/江原早哉香演出「コーカサスの白墨の輪」

マテイ・ヴィスニユック作/江原早哉香演出
「母が口にした「進歩」その言葉はひどく嘘っぽく響いていた」



受賞歴

- 2004年 第11回湯浅芳子賞・戯曲上演部門
『肝っ玉おっ母とその子供たち』、『冬』などの舞台成果
- 2004年 第4回倉林誠一郎記念賞・団体賞
レパートリーシアターの確立を目指し特色ある世界演劇祭を実現した成果
- 2004年 第11回読売演劇大賞個人賞 辻由美子
『肝っ玉おっ母とその子供たち』『ゴドーを待ちながら』
- 2005年 フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受勲
日本の子どもたちに対する『星の王子さま』の上演の功績と日仏を繋ぐ上演活動に対して
- 2007年 バコピア市民劇場(ルーマニア・バカウ市)主催 一人芝居の国際大会「第2回ガラ・スター国際演劇祭」
に辻由美子が演じる『ピカソの女たち～オルガ』が招待参加、最優秀大賞受賞
- 2019年 第20回テアトロ演劇賞受賞
『記憶の通り路』ほかの上演に対して

演劇との出会い

高階ひかり 〈2012年度研究生〉

東京演劇集団風との出会いは高校一年生の時です。私の通っていた高校は、専門学校のような学校で、数ある学科やコースの中、私は普通科芸術文化コースに進学しました。芸術文化コースには、伝統として新生が入る同じコースの先輩たちに自分の夢を宣言する場があり、次々に同級生が自分の夢を宣言する中、“あなたの夢は？”と聞かれ、“何也没有”と発言したのは、私ただ一人だけでした。自分が全くもって場違いであることにその時初めて気がつきました。

芸術文化コースに未来を見出せないと思った私は、早々にコースを変更することを考えていました。その最中、コースを変更する前に、賭ける思いで二年生の授業の一貫である5日間の東京研修に、前倒しして一年生で参加しました。その東京研修の最終日、私は《東京演劇集団風》と初めて出会いました。研修のために訪問した拠点劇場の《レパトリーシアター KAZE》で『フランクフルトに恋人がいるサクソ奏者が語るパンダの物語』を観劇し、同じ年に学校の芸術鑑賞行事で劇団風の『肝っ玉おっ母とその子供たち ～あとから生まれてくる人たちに』を観劇しました。いろんな生徒がいる客席に本気で向き合う劇団員の姿勢と、どんな生徒であってもその観客たちと出会う瞬間を、見逃すまいとする劇団員の壁の無さが、私の演劇に対する“嘘っぽくワザとらしい”というイメージをまるきり変えました。

私は高校を卒業してすぐに劇団風の研究生となり、三年間の研究期間を終え、劇団に入団しました。劇団での研究期間は濃密で、研究生の一年目は、劇団風との初めての出会いとなった『パンダの物語』の作者と同じマテイ・ヴィスニユックが書いた風のレパトリー作品『戦場のような女—あるいはボスニア紛争の戦場のような女の性について』の読み稽古から始まりました。この作品は女性二人芝居で、同じ年に実習生として入った倉八ほなみと、この作品を提示した劇団の芸術監督 浅野佳成と共に丸一年かけて挑み、実習生卒業公演として上演しました。「どういふ公演にしたいか自分たちで企画してみなさい」という浅野からの提案で、私たちは劇団員に手を借りてポスターとパンフレットを作り、チケット代を1000円として上演しました。卒業公演に向かう最中も、全国巡回公演のツアーにスタッフとして参加し、ツアーの間には浅野を始め、風の俳優 栗山友彦、白根有子とのワークショップや勉強会を度々行いました。私にも風の観客だった時代、風の研究生だった時代があったからこそ、今、東京演劇集団風の俳優として、未来の仲間に伝えたいです。《東京演劇集団風》は演劇を通して出会える生身の人の姿やその場にしかない時間、つながることのできる空間を共に作りたい、演劇が自身の人生でありたいと願う人が生きる“場所”です。私は今、この“場所”で、間違えながらも自身の可能性と出会い、人の可能性と巡り合い、そして、演劇の可能性を考え続けています。

風という場所、歩み続ける中で

倉八ほなみ〈2012年度実習生〉

劇団風と出会った実習生の頃、同期の高階ひかりと共に、一つの節目としての卒業公演、マテイ・ヴィスニユック作『戦場のような女』の稽古場で言われた言葉がある。

“違和感を排除するな！ あぜ道を歩け！”

当時の私は、いったい何を言われているのか分からなかったが、何かに対する強い怒りと出来ない自分に苛立ちを覚え、恥ずかしながら、半ば八つ当たり、悔し泣きをしながら半ば意地で稽古を続けた。その問いかけは、若い観客たちと共に公演を創る全国巡回公演をはじめ、風の演劇に向かう姿勢と活動を通して出会う観客や社会、“私”を通し、今も私にぶつかり続けている。

違和感を排除するという事は、他者や世界に触れたとき、その瞬間で捉え感じていたものを、出会ってきたものを、思考する自分を手放してしまうことではないだろうか。

演劇と向き合い、痛感したことは、やろうとすればするほど、頑張れば頑張るほど上手くいかないことだった。そんなときほど、問い続けなければならない。

その行為の中に相手が存在しているか、相手の声が地脈のように体を巡っているのか、出会っているはずのものを手放しているのではないかと。

既存の枠に自分自身を当て込み、間違いを直すことで自分を曲げ、無難な正しい答えや結果に向かって真っすぐに歩いていくのではなく、例え失敗しようと、自身をさらけ出し、不器用であっていい、他者や世界に触れたとき、自らで考え判断し、反発や反抗、痛みや苦しみ、触れたもの、出会った人々への喜びや楽しさや愛しさや希望を持つ自分自身を見つめ続け、立ち続けることが、可能性を生み出していく。

役割に捕らわれず、劇団員全員が企画、運営、プロデュース、公演を行い、影響し合い循環していくという特色を持つ劇団風は、言葉や想いだけではなく、自身にとって、人々にとって演劇とは何かと、行動し、実践し、試み、戦い続けることで生み出していく場所である。

私たちの中に根をはり息づく不可解さや違和感、芸術への探求心、地につき立っているその足で、あぜ道を歩き、出会い続けるものが、今を、これからを、創りだしていく。

不恰好でも不器用でも、赤々といのちを燃やし生きる若い人たち、芸術に向き合うその姿を信じ、手放さず、歩み続けてほしい。

風との出会い

蒲原智城〈2013年度実習生〉

私が東京演劇集団風と出会ったのは高校三年生の時、福岡県での『Touch ～孤独から愛へ』の一般公演を観劇した時でした。

当時私は、舞台俳優として生きていきたいと考えていたこともあり、『Touch』を観る前はメモ帳を片手に「プロの芝居を観て、何かひとつでも勉強しよう」という姿勢でした。ですが、物語が進んでいく中で、触れられる（Touch）ことで徐々に心を開いていく兄弟の姿や、触れる（Touch）ことで自分の思いを伝え、相手を感じ取ろうとするハロルドの姿が自分自身や親、兄弟のことと重なり、目の前で起こる様々な出来事が単なる虚構という枠を越え、自身の記憶や経験などが呼び起こされ、冷静に勉強をしようとしていた自分はその中にはおらず、一文字もメモを取ることなく芝居に引き込まれて、とにかく号泣していました。

そしてカーテンコールでは、劇場という空間の中で誰かの存在や生まれてきたものを発見した時に「今ここで何が起こっているんだ」という不思議さや「私もこういう俳優になって人と出会いたい」という思いを持ったことを今でも鮮明に覚えています。高校生だった私はおそらく、カーテンコールの際に俳優が演技空間から素の状態への境界線を越えたその瞬間に、“俳優が観客と向き合う姿勢”を俳優から感じ、風へ入ろうと決心したんだと思います。

そして私は今、一年の実習期間と三年の研究期間を経て、風の劇団員として全国巡回公演やバリアフリー演劇、群馬県みなかみ町にあるアトリエでのゼミやワークショップなど様々な劇団活動を行っています。

劇団活動を続けていく中で私は、風の活動には人が存在している、と思います。

ひとつひとつの動きに試みを持ち続け、原点に立ち返り、これからも演劇を問い続けたい。

私の芝居の原点

石岡和総〈2016年度実習生〉

私が初めて演劇の道に進もうと思ったのは、高校2年生の冬だった。それまでテレビや映画を見るくらいで、演劇を生で観ることなどなかった私にとって、学校で観た東京演劇集団風の『ハムレット —to be or not to be』はそれほど印象的だった。

普段自分たちが使っている体育館が劇場に変わっていること、目の前で大人が本気で芝居をしている姿、絶対に寝ると思っていた友達が芝居を見ている姿、それらすべてが私に上京を決意させた。専門学校での2年間を経て、私は劇団風に実習生として入団した。

実習期間が始まってすぐ私は『ヘレン・ケラー ～ひびき合うものたち』の巡回公演で役に就くことになった。自分が高校生の時、観る側だった場所にいきなり立つことになったのだ。そこで出会う若い観客たちの姿は私に多くのことを感じ、考え、経験させた。その後、東京での公演でスタッフに就いたり多くのことが目まぐるしく進んでいく一年の終わり、実習生卒業発表として『最後のゴドー』（マテイ・ヴィスニユック作／江原早哉香演出）を劇団員の全員の前で発表した。

その後、3年間の研究生期間を経て劇団員になった今、この実習生の1年間は私の役者としての始まりの時であり、立ち返るべき原点であると感じている。今の社会では、教えられたことをうまくこなせる者が優等生で、こなせない者は劣等生として見られるだろう。だが入団してまずやったことは、芝居をやる方法を学ぶのではなく、実践だった。実践の中で何を見、何を聞き、何を感じたかが、「なぜ今、演劇をやるのか」という問いを見つめなおす一つの柱となっている。このことは芝居をやるということだけに留まらず劇団活動においても同じだ。現在、約250ステージ以上の公演と、それらを作る活動の中で、私の持つ原点と、新たに出会うものと共に劇団を、劇団活動を創造していきたい。